



5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

にんぎょひめ

アンデルセン童話

イラスト さとうひろみ

ふかいふかいうみのそこに、
なにがあるかしっていますか？

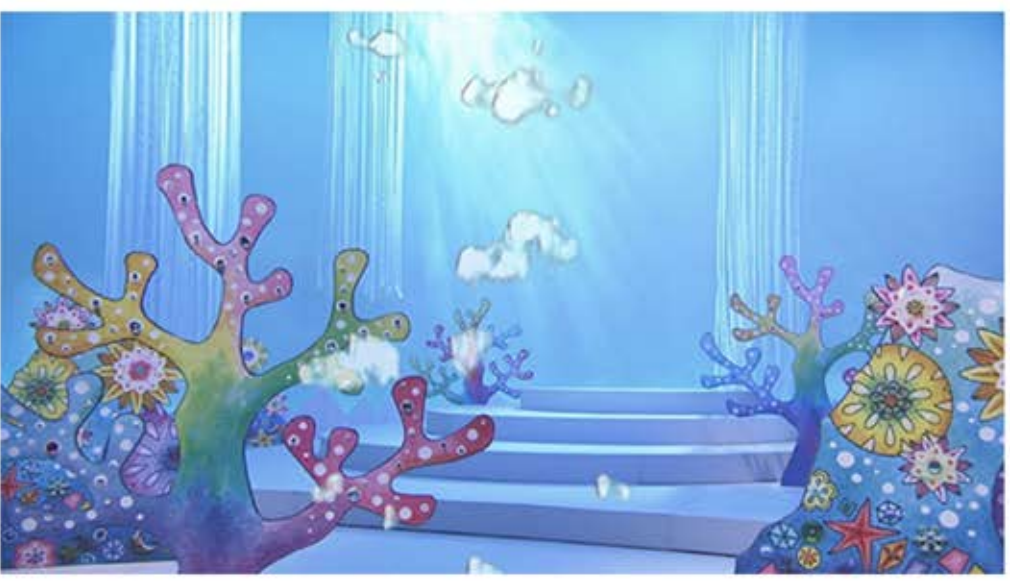
そこには、サンゴも
いろとりどりの貝でできた、
にんぎょのおしろがあるのです。

おしろには、
六人のきれいなにんぎょひめが
くらしていました。

なかでも、
一ばんすえのにんぎょひめは、
うたがじょうずで
それはそれはうつくしいこえを
もっていました。

にんぎょひめ

「♪うたは わたしのしあわせ
うたは わたしのたからもの
うたえば ところ ときめくの



すえのにんぎょひめには、
もう一つ、大すきなことが
ありました。

それは、おねえさんたちからきく、
にんげんのせかいのおはなしです。

にんぎょひめ

「ああ、

うみの上って

どんなところなのかしら！

わたしもはやく見てみたい」

にんぎょは十五さいになると、

うみの上に出ることをゆるされます。

にんぎょひめ

「では、おねえさまたち、いってまいります」

にんぎょひめは、むねをはずませながら、
うみの上へむかって、およぎました。



にんぎょひめ

「まあ、うみがきんいろにひかっているわ！
あ、あれがふねね、なんて大きいのかしら」

ふねにちかづいていくと、
うつくしいうたごえがきこえてきました。

それは、
ふなべりでうたう
わかい王子のこえでした。

にんぎょひめ

「まあ、
なんてステキなこえ・・・」



よるになると、きゅうにうみがあれはじめました。
ふねは、大きななみにのまれ、あっというまに
しずんでしまいました。

にんぎょひめ

「たいへん！

早くたすけなくちゃ！」



にんぎょひめは、あれくるううみの中で、
気をうしなっている王子を見つけたら、
だきかかえて、りくまでおよぎつづけました。

ようやく、小さな入りえにたどりつくよ、
すなはまに王子をそっとねかせました。

にんぎょひめ

「王子さま、どうかいじぶじで……」

そのとき、人のけはいがして、
にんぎょひめは、いそいで
いわかげにかくれました。

やってきたのは、
わかいむすめです。

王子

「ん……、

ああ、あなたが
たすけてくれたのですか、
ありがとうございます」

にんぎょひめ

「ああ、王子さま……」



それから、にんぎょひめは王子のことが
わすれられなくなりました。

にんぎょひめ

「♪こいをしたの あのかたに

もっと そばにいたい

もっと こえをききたい

でも このからだでは いっしょにいられない

どうしたらいいの」



おもいなやんだすえに、
にんぎょひめがむかったのは、
ぶきみなどうくつにすむ、
うみのまじょのところでした。



まじょ

「ひひひ…、にんげんになりたいのかい？
いいとも、おまえに足をあげようじゃないか。
これがくすりだよ。
ただし、おまえのだいじなものどひきかえだ」

にんぎょひめ

「だいじなもの…」

まじょ

「そいつは、おまえのそのうしへつらいつえだよ」

にんぎょひめ

「こえを・・・そんな・・・
かまいません、にんげんになれるのなら！」

まじよ

「それから、もう一つ、もし、王子が
ほかのむすめとけっこんすることになったら、
おまえはあわになってきてえてしまう。
それでもいいのかい？」



にんぎょひめ

「・・・はっ」

にんぎょひめは、まじよから
くすりをうけとると
いっきにのみほしました。

どのくらいたったでしょう。気がつくよ、
にんぎょひめは、あの入りえにたおれていて、
目のまえには美しい王子が立っていたのです。

王子

「気がついたんだね、
よかった・・・。
きみは、どこからきたの？」

にんぎょひめ

「・・・」

こえをうしなった
にんぎょひめは、こたえることができません。
そのかわり、からだには足がついていました。

王子

「ひろひろはじいじのぼんごじょうし。
ぼくのころにゆるゆるさよ」



王子は、
あいらしいにんぎょひめを
かわいがり、
いっしょにうまにのって
森をかけたり、
ことりのさえずりを
きいたりしてすごしました。

しかしある日、王子は、
だれにもいっていなかった
むねのうちを
にんぎょひめにはなしはじめました。

王子

「じつは、ぼくにはわすれられない人がいるんだ。
入りえでぼくをたすけてくれた人……、
いったいどこにいるんだろう」

にんぎょひめ

「おたすけしたのはわたしです……」

しかし、にんぎょひめのこころのこえが、
王子にとびくことはありません。



そして、すうかげつがたったある日。
王子がいきをきらせて、
にんぎょひめのもとにやってきました。

王子

「きいておくれ、やっと見つけたんだ。
入りえでぼくをたすけてくれた、いのちのおんじんを」



にんぎょひめ

「え・・・」

王子

「おもいつづけていた
あの人は、
となりのくにの王女
だったんだ」

にんぎょひめ

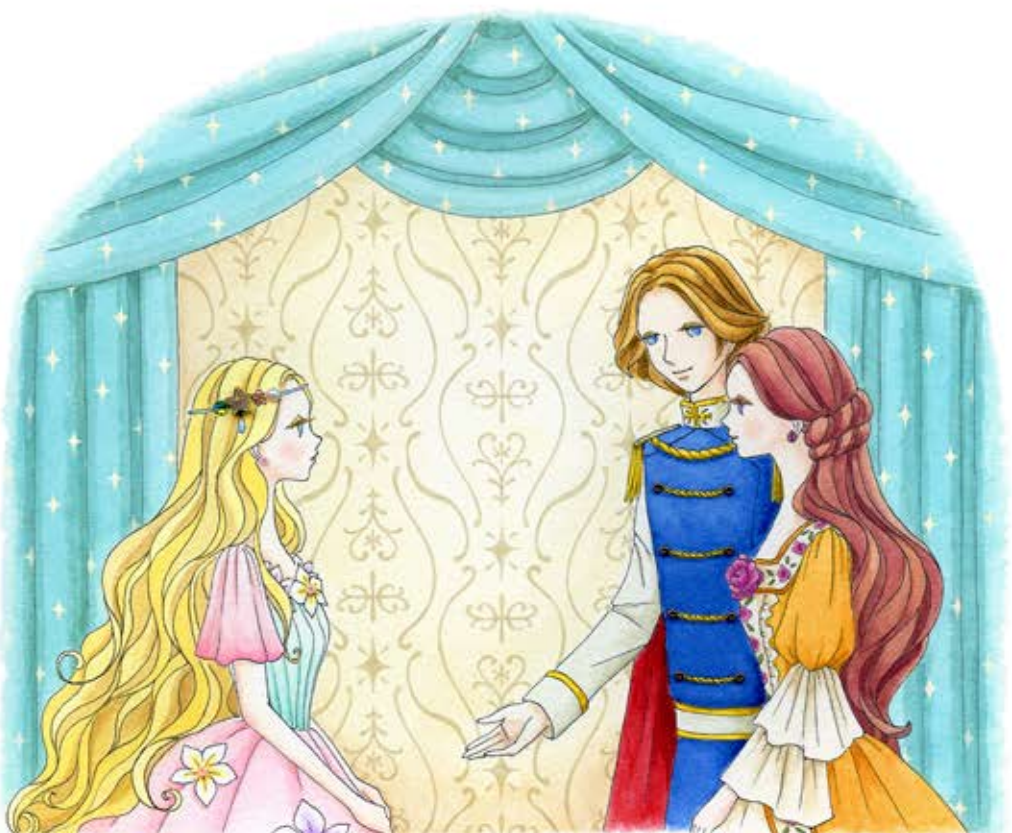
「そんな・・・」

しぎの口。

王子は、となりのくにの王女をつれてきて、
にんぎょひめにいいました。

王子

「ぼくは、
かのじょとけっこんする。
きみは、ぼくのしあわせを
よろこんでくれるかい?」



にんぎょひめの耳に、
まじょのこえがよみがえります。

まじょ

「王子がほかのむすめとけっこんすれば、
おまえはあわになって、きえてしまうよ」

にんぎょひめ

「ああ、あなたをおたすけしたのはわたし．．．、だけど．．．」

ああ、王子さま、なんてしあわせそう。

そうよ。王子さまのしあわせは、わたしのしあわせ．．．」

にんぎょひめはひとり、

うみをのぞむばしょへむかいました。

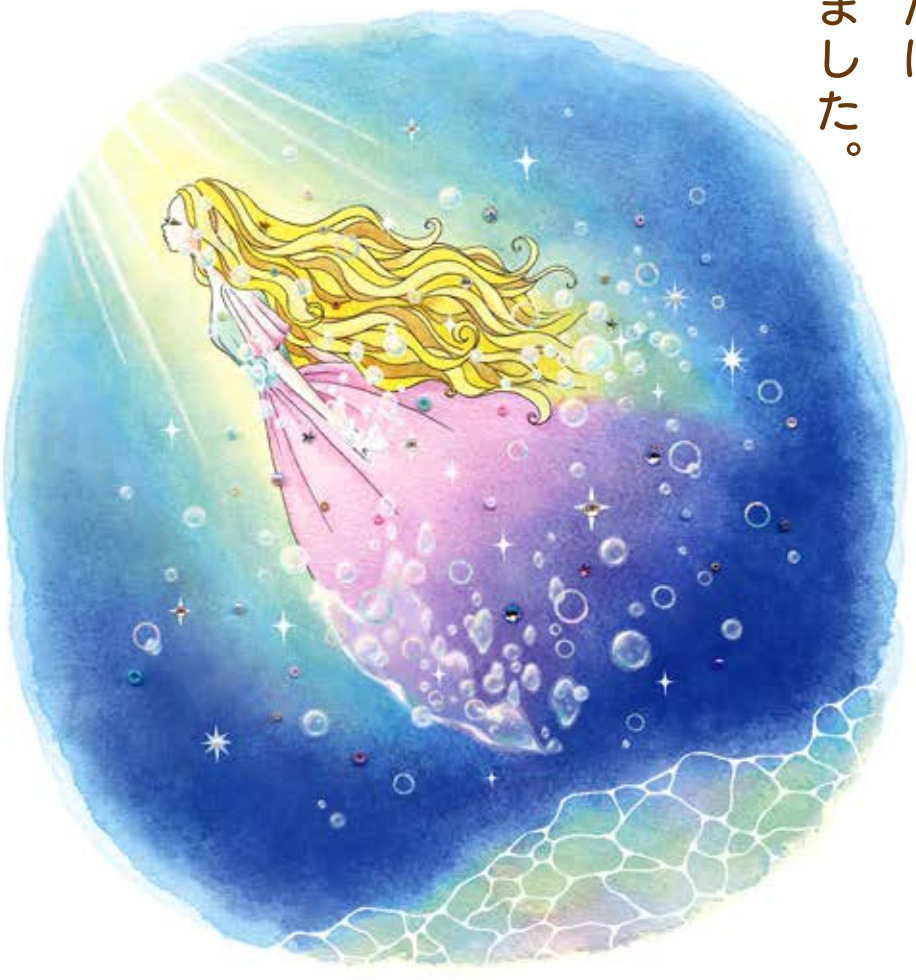
にんぎょひめ

「さようなら、王子さま。」

あなたにあえて、しあわせでした」

にんぎょひめのからだは、

しずかにとけていきました。



お
わ
り